藤女子大学人間生活学部紀要，第 52 号：101–112．平成 27 年．
The Bulletin of the Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 52: 101–112. 2015.

北海道童謡史 (2)

── 黎明期の童謡詩人たち ──

柴　村　紀　代

History of Children's Songs in Hokkaido (2)

── Writers of Children's Songs in the Region's Predawn Era ──

Kiyo SHIBAMURA

Abstract

Children's songs spread across Japan in a children's magazine called Akai Tori (Red Bird), which was first published in 1918. The songs in the magazine were selected by Hakushu Kitahara, who had a great influence on writers of children's songs in Hokkaido.

The history of children's songs in Hokkaido was discussed in the Bulletin of the Faculty of Human Life Science, Vol. 51, of Fuji Women's University (2014). In this paper, writers of children's songs who supported the predawn era of Hokkaido and were not described fully in the previous paper are discussed.

1　はじめに

前回の紀要 51 号では、童謡の起源から始まり、北海道に影響を与えた来道作家、北原白秋、三木露風、野口雨情や、その後の支部沈黙など道内作家を扱った。今回は前回触れきれなかった北海道の黎明期を支えた童謡詩人たちについて述べたい。

2　岩野芳鳴と樺太童謡

岩野芳鳴（1873(明治 6)年－1920(大正 9)年）は、淡路島生まれ。大阪や東京の明治学院と転学し、1901(明治 34)年第一詩集『霜じも』を出版。翌年「明星」に参加。小説「耽溺」で自然主義文学の一翼となる。1909(明治 42)年 6 月樺太に渡り、カニの缶詰工場経営に着手するが失敗、同年 8 月から 10 月にかけて北海道を放浪する。樺太滞在時に児童雑誌「少年」(時事新報社　1903 年 10 月創刊）に毎月 2 編、計 160 編の童謡を載せる（掲載時は「唱歌」と称していた)。畑中圭一は岩野芳鳴を「近大童謡誕生の 10 数年前の先駆的業績」[1] として、北原白秋や赤い鳥童謡が世に広まる前の重要な一人と評している。また、上笙一郎は樺太児童文学の序幕を「岩野芳鳴の樺太童謡」としてその名を上げている[2]。童謡の掲載誌「少年」は函館中央図書館に 83 冊所蔵されており、2014 年度の「函館貴重児童雑誌付録・児童雑誌データベース」[3] に収録され、そのうち 26 編を確認できた。その内の 1 編を紹介する。

所属：
藤女子大学人間生活学部保育学科
Department of Erarly Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

アイノ熊狩り

熊の　喉には　月の輪がある。
その輪をめがけてマキリを運ぶ。
マキリ鋭く喉に入る時、／いかなる毛物も　その場に倒る。
アイノひげ武者　熊をおそれず
その　立ちあがるのを　よく　待ちかまへ。
手をば　ひろげて　なかに　むぐりて
手なみも　確かに　月の輪を　刺す。

「少年」72 号　明治 42 年 9 月

この作品には北海道に生息しないツキノワグマが歌われていて、事実誤認があるが、明治の児童雑誌にいち早くアイヌを歌った作品として注目した。また楽譜がついている作品も多く、作曲は北村向南子となっている。

3　浜田均二と童謡雑誌「こびと」

浜田均二（1904(明治 37)年－1974(昭和 49)年）は小樽市に柴野平太郎三男として出生、九歳の時父親死去により浜田長吉の養子となり、浜田姓となる。1918(大正 7)年、14 才で庁立小樽商業高校入学。1 年上に小林多喜二（1903(明治 36)年－1933(昭和 8)年）がいた。この頃、中央から巌谷小波、久留島武彦らが小樽で口演童話を行い、1917(大正 6)年小樽グリム童話会が発足している[4]。

この小樽グリム童話会が活発に活動しているなかで、浜田均二は 1913(大正 12)年に童謡・童話サークル「倭人の揺籃」会を組織し、童謡・童話誌「こびと」を発行した。サイズはＡ 5 版、26 頁の小雑誌だが、発行所が庁立小樽商業学校「倭人の揺籃」会、代表者浜田均二とあり、学生が童話・童謡誌を出したことで注目を集めたようである[5]。

内容は、英詩、西條八十、野口雨情の童謡、同人の童謡の他、子ども達の応募童謡が掲載されている。投稿者は大分、山梨、水戸、茨城から、小樽市内は花園小学校、景徳小学校、緑小学校などさすがに市内の小学校の投稿が多い。年齢層は尋常三年、高一、高三など幅広い年齢層である。不思議なのは、創刊号にもかかわらず、全国からの投稿があることで、あとがきには応募が多数のため全部は載せきれなかったとある。何らかの中央の雑誌に募集呼びかけをしたのかどうか、この点は不明である。また西條八十、野口雨情の童謡については、あとがきに二人の快諾を取ったとある。西條八十の「九人の黒んぼ」は「童話」大正 11 年 5 月号、「烏の手紙」は「赤い鳥」大正 9 年 3 月号、野口雨情の「人買船」は「金の船」大正 9 年 4 月号掲載といずれもその後、与田準一編の「日本童謡集」（岩波書店　1957 年）に収録されている秀作である。浜田均二が「こびと」を創刊した 1923(大正 12)年当時、すでに「赤い鳥」（大正 7 年 7 月創刊）だけでなく、「童話」（コドモ社　1920(大正 9 年）4 月創刊）「金の船」（1919(大正 8 ）年 11 月創刊）が小樽で流布し、購読されていたことが確認できる。

浜田均二は「こびと」に童謡 2 編を載せている。その 1 編。

黒んぼの子供

トマト畑の真昼間／あっち見ちゃこっち見ちゃのぞいてる／トマト泥坊を見付けた。
縄持ってこっそり行って見たら／黒んぼの子供がたった一人／にっこりこっくりのぞいてた。
檻から逃げた猿の尻／なんだか似てると黒んぼの子／縄持ってこそりのぞいてた。

浜田均二はその後、1924(大正 13)年 3 月庁立小樽商業学校を卒業し、旧北海道銀行本店[6] に就職、同年北海道童謡協会を作り、機関誌「童謡芸術」を発刊した[7]。

童謡の創作活動では、1926(大正 15)年 2 月「童話」に童謡「栗の実」が選外佳作。同年 4 月に「金の星」に童謡詩「松の細葉の」掲載。1929(昭和 4)年 3 月号「赤い鳥」(18 巻 3 号) に童謡詩「日暮」が掲載されている。

松の細葉の

チラリ　チラ　チラ／雪や　やってきます／庭の松の木／みな　かこひました／見ても暖かそに／雀きてなけ／チラ　チラ雪ぞ／松の細葉の／かげでなけ

「金の星」(大正 15 年 4 月)

日暮

お山は日暮れだな、／日まはりもまはったな。／日まはりよ、日暮れよ、／雨も降ってきたな。／桐の広葉、ぬれてるな、／林檎の袋も、ぬれたな。

「赤い鳥」(昭和 4 年 3 月号)

1925(大正 14)年に浜田均二は北海道銀行を退職し、小樽市手宮尋常小学校代用教員となる。翌年、小樽市手宮尋常高等小学校訓導となる。1929(昭和 4)年に日本童話会小樽支部結成、支部長となる。その後、1940(昭和 15)年に樺太に渡り、終戦後小樽に戻り、1974(昭和 49)年死去。浜田均二は童謡製作の他、向井流水泳の普及に務め、北海道水泳指導者連盟を結成し、初代会長に就任するなど、水泳界でも功労者となっている[8]。

4　片平庸人(つねと)と「童話」(コドモ社) 掲載作品

片平庸人 (1902(明治 35)年－1954(昭和 29)年) については、前回の「北海道童謡史」で少し触れた。片平庸人は仙台市生まれ。仙台時代「おてんとさん童話会」で鈴木碧らとともに口演童話等の活動をしたが、1930(昭和 5)年、姉の嫁ぎ先の函館に移住。函館では北海道新聞社函館支社に勤務する[9]。西条八十に私淑し「童話」に童謡が多数載る。1934 年、「ほうほう・はる」を函館のすかんぽ童謡社から出す。その他、遺稿集『青いツララ』(片平イト編) が 1978 年 9 月に出ている。1989 年発行の『北海道児童文学全集』第 13 巻 (詩と童謡) には、『青いつらら』から 2 編、「赤い鳥」掲載の「河州」(昭和 6 年 3 月号) が載っている。

今回は「童話」の掲載作品について触れておきたい。コドモ社発行の「童話」は 1920(大正 9)年 4 月～1926(大正 15)年 7 月まで全 75 冊を出し、「赤い鳥」「金の星」と並び、大正期三大雑誌のひとつと称されている。「童話」の創刊号では、編集者に千葉省三、表紙絵に川上四郎、執筆陣に浜田広介らいたが、童謡に適当な詩人がいず、創刊時は童謡なしであった。その後、藤森秀夫、島木赤彦が童謡欄を担当し、3 巻 4 号 (1922(大正 11)年 4 月) から西條八十が童謡担当になることで、ようやく体制が整った。西條八十の選によって注目を浴びたのが、金子みすず、佐藤義美、片平庸人である。片平の童謡は、5 巻 3 号 (大正 13 年 3 月号) から 7 巻 7 号 (大正 15 年 7 月号) まで 26 編が採用されている。

ほろほろ明り

ほろ、ほろ／啼くのは／山の鳥
ほろ、ほろ／ちるのは／山の萩
ほろ、ほろ／ひぐれの／山の道
ほろ、ほろ／ふもとにゃ／灯が見える

「童話」 5 巻 3 号 (大正 13 年 3 月号)

山のかなかな

やまのかなかな／啼くころの
甘い匂いの／日のくれは
村のこどもよ／さむしかろ。

甘い匂いの／日のくれは
空の茜の／うす明り
山でかなかな／さむしかろ。

「童話」5巻8号（大正13年8月号）

片平庸人について、加藤多一は「北海道の児童文学」で次のように紹介している[10]。

片平は、木村（不二男）が「赤い鳥」系だったのに対して「童話」（「大正9年創刊」）系の八十、雨情の影響をうけた詩人である。昭和のはじめ、道南中心に童謡運動がさかんになったこと、およびこの質の高い童謡集（謄写版「ほうほう•はる」）が発行されたことは意義深い。北海道の文化が道南から始ったことと無関係ではあるまい。（中略）なお、この片平については、木村不二男が「ニシパの祭」の中でくわしく書いている。放浪しつつ、童謡をつくり、恐らくは清貧のなかで死んで行った詩人片平を、こばんだものは何であったろう。純粋さの故に現実に適応できなかったひとりの詩人。そのことを涙ながして悼む木村の文章に、私は注目した。片平の破滅型の人生に純粋さを見る木村は、同時に童謡の情熱の故郷を見つけているのである。

5　奥（おく）　保（たもつ）と「童謡界」

奥保（1907（明治40）年－1972（昭和47）年）は三笠市生まれ、札幌師範学校卒。岩見沢市で学校長となり吉田一穂と親交篤く、一穂の岩見沢での講演も数回あるという。その後、岩見沢教育研究所所員となる。早くより「日本詩壇」に所属して詩を発表。「湾」同人、日本現代詩人協会会員。子ども達の教育の実態を教育雑誌に連載。空知郡三笠で1936（昭和11）年5月に「童謡界」創刊。印刷は岩見沢で行われている。創刊号には執筆者6人の10編の童謡と1編の随筆が載っており、奥保は1編の随筆と3編の童謡「原っぱで」「みなと釧路」「こぶしの花」を載せている。

こぶしの花　　奥　保

こぶしの花は／いいなあ／／あれ、あの山にも／咲いてゐる
今朝、登校の／みちの上／とてもやさしく／咲いてゐた
こぶしや、こぶし／白い花／／とてもやさしい／白い花
こぶしの花は／いいなあ／／あれ、あの山の／山ざくら……

「童謡界」第2号は、1936（昭和11）年7月30日発行。印刷所が北海謄写藝術院　札幌市南11条西7丁目に変わっていて、12編の童謡が載っている。冒頭に載せられた渡邊直吉の童謡は、1936（昭和11）年の時節を思わせる。

葱ぼんぼ　　渡邊直吉

畑の／兵隊／葱ぼんぼ
朝ぎり／煙幕／特科隊
花から／毒瓦斯／青い空
雲は／RR／飛行船
風と／駆足／葱ぼんぼ
お日様／高い／タラランタ

蟻とお皿　　奥　保

クローバの／馨り／ながれて／宵ぐちの／月の／光りは／愉しそう。
葩に／泊った／蟻の夢、／月の／光に／驚されて／銀のお皿を／わりました。
泣いて／夜明かす／夢でした。／醒めりゃ／宵ぐち／月さまが／露の果て迄／笑ってる。
クローバの／馨り／ながれて／宵ぐちは／月も／静かに／歩きます。

奥保の本が道立図図書館と岩見沢図書館に 5 冊あった。
1　『ブルカトリオの路』奥保　（北海道詩人協会　発行者　入江好之　1958 年 11 月）
奥保の第 1 詩集　戦争をはさんだ詩歴 30 年の集大成。「この詩集を出すに当たって、畏友坂本亮氏、良き詩の友入江好之氏に深く感謝する」とある。
2　水害地中学生詩集『怒れる石狩川』奥保編　（1964（昭和 39）年 3 月　北書房）昭和 36 年 7 月、赴任した最初の年、30 年ぶりの水害。翌年も水害に見舞われる。水害地の子ども達が如何にしてたたかったかの記録。「詩集　とまともきゅうりもなすびも死んだ」「詩集　空想のバス」「詩集　精いっぱいたたかったでしょうか」の 3 詩集の抜粋。
3　鍵っ子留守っ子詩集『いえにかえってもだれもいない』（岩見沢教育研究所編　1965 年 7 月）農繁期の鍵っ子の詩集。「おかあちゃんたち／たんぼへいっていないよ／さびしいから／くろとあそぶの／かぼちゃんがかえってきたら／いっしょにあそぶの／ 6 じになったら／かぼちゃんと／「ひょっこり　ひょうたんじま」みるの」 1 年　せとまりこ
ガリ版刷りの 54 頁の小雑誌
4　北海道子ども詩集『北国に生きる子』（奥保　楡書房　1977 年 3 月）
「離島の子〈利尻・礼文・焼尻〉」「鶴のいる村の子〈釧路―鶴居〉」「馬といる子〈日高〉」など北海道地方の子どもの詩を集めてある。それぞれの詩に奥保の解説が付いている。
5　奥保第 2 詩集『冬の門』（1966 年 5 月　発行所　新星書房　東京都）

6　海老名禮太と童謡集「どんぐり」・「函館の小学生」掲載作品

6-1　海老名禮太と生活綴り方事件

海老名禮太（1906（明治 39）年－1957（昭和 32）年行方不明）は後志管内美国町（現積丹町）に生まれ、旭川師範学校 1 期生。卒業後函館に赴任。函館女子高等小学校勤務。童謡集『どんぐり』を 1935（昭和 10）年に発行。1936（昭和 11）年函館どんぐり童話会、オテントサン童話会、紅い鳥会が合併し「函館童話協会」設立。会長岡田健蔵、海老名禮太は庶務。「函館の小学生」の編集に携り、童謡その他を多数発表。昭和 11 年の「北海道綴方教育連盟」事件に連座、1941（昭和 16）年北海道綴り方事件第 2 次検挙で小笠原文治郎、日下三蔵と共に逮捕される。

海老名禮太が関わった北海道綴方事件とは次のような事件であった。1940（昭和 15）年東北地方から起こった「子ども達に自分の身の回りのことを見つめさせ、綴方（作文）に書くことで客観的に自己や周囲を認識させる教育運動」すなわち生活綴方教育が、全国的に広がった。北海道では釧路の小学校教師だった坂本亮が 1935（昭和 10）年 5 月、生活綴方の雑誌「綴方倶楽部」（千葉春雄編）のなかに衝撃的な作品を見つける。函館の小笠原文治郎の指導の下に書かれた「ナット売り」（函館常磐尋常 4 年　菅原菜々夫）という綴方だった。これに刺激され、阪本は 1935（昭和 10）年 8 月、北海道綴方教育連盟を立ち上げ、機関誌「綴方林」や子ども達の作文を集めた「北海道文選」を発刊するなど活発な活動を開始した。しかし、1925（大正 14）年に治安維持法が成立した後、1927（昭和 2 ）年北海道集産党事件、1928（昭和 3 ）年労働農民党 1600 人が検挙された 3 ・15 事件など時代の風潮は悪化の一途を辿っていった。1940（昭和 15）年、生活綴方に対する弾圧は、北海道でも 1940（昭和 15）年 11 月 21 日から 1941（昭和 16）年 1 月 16 日にかけ、坂本亮、小鮒寛、横山貢ら 12 名が起訴、50 数名が検挙される事件となった。海老名は特に生活綴方運動の中心的メンバーではなかったが、函館における児童文化運動の中心的存在として検挙された。

その後退職を余儀なくされ、1942(昭和 17)年満州ハルビンの女学校教師として赴任。1953(昭和 28)年帰国、倶知安、ニセコ小学校勤務。子ども達の教育の実態を教育雑誌に連載。入江好之と二人で詩と随想誌「季信」(1954(昭和 29)年を刊行。1957(昭和 32)年、蘭越町の小学校校長時、行方不明となり、1969(昭和 44)年死亡宣告[11]。

6-2　海老名禮太の童謡作品

海老名禮太は前述の「童話」(コドモ社) の童謡欄に童謡が一編採用されている。

お月さま（童謡　大人の部）　海老名禮太

昨夜（ゆうべ）あったお月さま／今夜はどこであひませうね
あの川のそばで／またあひませうかね／けれども　河原はさむいでせうね
裏のたんぼも／枯れちゃったし
ポプラの木陰も／寂しさうだし
公園のベンチも／いやな気がするし
一体どこであいませうね
昨夜（ゆうべ）のお月さま／今夜は寒いですからね

「童話」5 巻 4 号（大正 13 年 4 月号）

その他、「葉っぱ」が「童話研究」[12] 9 巻 12 号（昭和 5 年 12 月 5 日）に掲載されている。「童話研究」は、大正時代の自由主義教育を背景に、各地の童話会の消息を伝えるなど貴重な資料であり、海老名禮太が活躍した函館の「オテントサン童話会」や各地の日本童話協会の支部の動きを載せている。

「童謡集　どんぐり」創刊号は 1935(昭和 10)年 9 月 20 日発行。編集発行人は海老名禮太、発行所函館どんぐり童話会　7 編の童謡と、渡邊喜惣、宮川エツロー、うみ・まさを、天沼ないみ、中野まさをが執筆している。巻末の「同人消息と紹介」の中で、渡邊喜惣は童謡誌「ゆりかご」で活躍、札幌を代表する童謡詩人と紹介されている。宮川悦朗は「近く作品集を刊行予定。福山産の童謡詩人」とあり、海老名禮太は「コロンビアより『鳩ぽっぽ』『たんぽぽの兵隊』『蟻の兵隊』等を出す詩人」と紹介されている。

とんぼとり兵隊　海老名禮太

お日和　お日和　ぴつぴつぴ／もち竿かついだ　兵隊さん／ずらりと並んで　駆け足だ／
チッタカ　タッタ　チッタカタ
それきた　トンボの　飛行隊／それつけ　それつけ　突貫だ／逃げたぞ　そら追へ　駆け足だ／
チッタカ　タッタ　チッタカタ
とんぼは　にげてく　ぴつぴつぴ／もち竿　かついだ　兵隊さん／とんびの　後から　駈足だ／
チッタカ　タッタ　チッタカタ
お空は夕焼け　あかねぐも／もち竿かついだ　兵隊さん／ちへ勇んで　駈足だ／
チッタカ　タッタ　チッタカタ

「函館の小学生」175 号（下）昭和 13 年 9 月

この詩は昭和 12 年頃コロンビアレコードから山本芳樹作曲・川井良子唄でレコード化された。

海老名禮太の童謡作品は「函館の小学生」[13] に 26 編が掲載されている。

タンポポノヘイタイ

ドテノ　ヘイタイ　タンポポサン／シャッポヲ　ナラベタテ　トテチテタ／ハルカゼ　ソヨソヨ　フイテクル／シャッポガ　ユレルヨ／ヘイタイサン／タンタラ／タンタラ／タンタラタン／／(以下略)

「函館の小学生」146 号（下）昭和 11 年 4 月 23 日

海老名が函館で活躍していた時代は、日本が軍国主義への歩みを速める時期に当たり、「函館の小学生」も次第に軍事色を強めていった。編集に携っていた海老名も時局に沿う作品が多い。しかし、海老名は前述のように1941(昭和16)年北海道綴り方事件第2次検挙で逮捕され、退職。1942(昭和17)年満州ハルビンの女学校教師として赴任とある。次の作品は逮捕後の作品である。戦争が激しくなる中、こういう作品しか雑誌に載せることが出来ず、また、この時代北原白秋や西條八十など、多くの童謡詩人たちが勇ましい戦争賛美の歌を書いていたことも事実である。童謡の叙情性は、右にも左にも利用できることが改めて思い知らされる作品でもある。

シンガポールが落ちました

シンガポールが落ちました／ニュースを語るアナウンサーの／声もふるえて　居りました／城頭高く日章旗／勇士の顔も　見えてくる
シンガポールに日章旗／世界一だと自慢した／ユニオンジャックのイギリスは／ふるえ上がっているだろう／どうだ知ったか　日本の／強さを　正義のこの力
明るい東亜に生まれ出た／昭南島に日の丸は／強く御稜威(みいつ)をなびかせて／明るいお国となりました／桜の花も咲くでせう

「函館の小学生」217号（下）昭和17年3月15日

7　入江好之と少年詩

7-1　入江好之と北海道綴方教育連盟事件

入江好之もまた、北海道綴方教育連盟事件の犠牲者であった。入江好之(1907(明治40)年－1989(平成元)年）は小樽市生まれ、旭川師範学校を出た後、旭川日章小学校に勤務、教え子たちの詩集「少年」を刊行するなど学級運営にも熱心で、北海道綴方教育連盟の中部同人の集まりにも参加していた。1941(昭和16)年1月10日に突然逮捕される。釧路刑務所に収監された後、昭和16年7月に釈放されるが復職できず、1943(昭和18)年満州に渡りその後応召、戦後シベリアに抑留、5年後の24年帰国する。入江は師範学校在学中から詩誌「北斗星」を発行、1936(昭和11)年）第1詩集「あしかび」を刊行、早くから詩人として活躍していた。戦後は1956(昭和31)年)北海道詩人協会の創立に参加、20年間事務局長として協会を支え、「北海道詩集」の刊行にも尽力した。戦後は1962(昭和37)年北書房を立ち上げ、道内詩人の作品集や自身の詩集「凍る季節」(1968(昭和43)年)「ひとつの歴史」(1976(昭和51)年)、同年に少年詩集「花と鳥と少年」を刊行した。児童文学関係では「むかし話北海道」(全5巻　日本児童文学者協会北海道支部編　1964－1980年）などを出している。

北海道の児童文学との接点は1952(昭和27)年設立された日本児童文学者協会北海道支部の会員として、最初の作品集「原っぱ」にも参加、また1968(昭和43)年北海道文化賞受賞、晩年は横浜に転居しその地で亡くなった。

7-2　入江好之の少年詩集「花と鳥と少年」

入江好之は詩人である。詩集「ひとつの歴史」には、シベリア抑留中の記憶が辿られ収められている。4年間の抑留生活は望郷の念だけではなく、戦前から親しんできたロシア文学のトルストイやツルゲーネフの深い理解とも結びついていたことがわかる。それは「花と鳥と少年」の中の「シベリア物語」からも伝わってくる。北原白秋が旅人の目で見た異国情緒としてのサハリンではなく、それは未開の密林に鍬を入れようとするロシアの開拓民への深い共感であり、連帯の思いでもあった。

シベリア物語

長い馬車の列が地平にあらわれゆっくりと進んでくる／草原（ステップ）からステップへ／南から北へと旅をつづける村人がひとかたまりになって旅をつづける／極光（オーロラ）ののぞまれるところ／一生をかけても伐りつくすことのできない／大密林（タイガ）が目の前にひろがっている／村人は馬車をつらねて密林にのりいれる／その日から／しぜんとのたたかいがはじめられた
（中略）
シベリアの地の果までも／運命のきびしさにいどむように／一群の村人の旅だちの朝

タイトルの「花と鳥と少年」は冒頭の詩「花のなかをゆく」から取ったものと思われる。

花のなかをゆく

丘の斜面を流れる／赤い波／白い波／青い波／黄の波／波をわけてゆく男の子／花をわけてゆく女の子／みんなが花に見える／花が笑っている／花が話をしている
（中略）
子どもたちはみんな鳥になる／春の雲にのって／あ、みえなくなるよ

8　更科源蔵と百田宗治

8-1　更科源蔵

更科源蔵（1904（明治 37）年－1985（昭和 60）年弟子屈町字熊牛原野の開拓民の 9 人兄弟の末子に生まれる。1921（大正 10）年東京麻生獣医畜産学校に入学。1923（大正 12）年関東大震災で学校を中退し帰京。1925（大正 14）年詩誌「抒情詩」に 4 位入選。1928（昭和 3 ）年上京、高村光太郎を訪ね、詩誌「至上律」を編集。1930（昭和 5 ）年詩誌「北緯 50 度」創刊。 5 月、弟子屈村の屈斜路湖尋常小学校の代用教員となる。12 月第 1 詩集「種芋」を刊行。1931（昭和 6 ）年代用教員を追われる。1940（昭和 15）年札幌へ転居。「北方文芸」の編集に携る。1942（昭和 17）年北海道農会に勤務。1945（昭和 20）年 6 月戦災者受け入れの為東京へ向かう。戦後はアイヌ文化研究を中心に多くの著書がある。戦後は北海道文学館の初代理事長を務める。1944（昭和 19）年童話集『北の國の物語』（大鵬社）、絵本『夏ノ無カッタ北國』（1946（昭和 21）北方出版社）や児童文学では『父母の原野』から始る原野シリーズ（全 4 冊　1981－1986 年　偕成社）などがある。弟子屈町の役場前には、下記の「雲」の文学碑がある。

雲

もうお前は忘れているかもしれないが
あの時頬かむりをして
開墾地の隅で泣きじゃくっていた子供が
私だよ　雲よ

あのとき茜色だったお前が ──
見る見る光を失って灰色に沈み
夕べの空にとけてしまったのを
いつまでも見ていたのは
私だよ　雲よ

お前は忘れたかもしれないが
五〇年たってもあのときの涙が
まだ乾かないのだ　雲よ

（『更科源蔵詩集』北海道書房　1961 年）

8-2　百田宗治

百田宗治（1893(明治 26)年－1955(昭和 30)年）大阪市生まれ、早くから詩人として活躍、また生活綴方や児童詩の指導にも力を注ぐ。大正 15 年、三好達治、丸山薫、北川冬彦らと詩の詩誌「椎の木」を創刊、北海道からは伊藤整が参加した。昭和 7 年、波多野完治、滑川道夫らとともに児童作文の指導誌「工程」によって全国の綴り方運動を指導した。百田宗治が北海道にきたきっかけは東京空襲で焼け出され、疎開の相談を伊藤整にしたところ、当時更科源蔵が北海道に戦災帰農者の受け入れの仕事をしており、更科とともに津軽海峡を渡る青函連絡船で終戦の放送を聴いたという[14]。百田の疎開は 1948(昭和 23)年まで続き、その間、戦後刊行された児童雑誌「北の子供」[15] の詩の選者をしたり、童話集「はる・なつ・あき・ふゆ」[16] を出すなど道内の詩人や童話関係者に大きな影響を与えた。1948 年札幌を去り、千葉に居住後その地で没した。1959(昭和 34)年、上川郡安足間に詩碑が建立され、また 1985 年札幌を歌った詩が絵本『にれの町』（小野州一・絵　金の星社）として出版、産経児童出版文化賞美術賞を受賞した。「どこかで春が」は小学校の音楽の教科書にも載った、よく知られた歌である。

どこかで春が

作曲　草川信

どこかで「春」が生まれてる、
どこかで水がながれ出す。

どこかでひばりがないている、
　　どこかで芽の出る音がする。

山の三月東風ふいて
どこかで「春」が生まれてる。

「小学男生」1923(大正 12)年 3 月号

9　終わりに

前号に引き続き「北海道童謡史」をまとめてきたが、まだ触れきれなかった詩人たちがいる。北海道児童文学全集第 13 巻「詩と童謡」には、この他神沢利子、三宅知子、友田多喜雄の詩が拾われている。今回は黎明期にしぼっての記述だったため触れきれなかったが、今後機会を作って、全体をまとめたいと思っている。

注

1）畑中圭一「岩野芳鳴の童謡について」(「童謡文学研究」1990 年 11 月).
2）上笙一郎「岩野芳鳴の樺太童謡」(「日本植民地児童文学史　稿・18」「日本古書通信」967 号　2010 年 2 月号).
3）「函館貴重児童雑誌付録・児童雑誌データベース」函館児童雑誌及び北海道児童雑誌データベース作成委員会（委員長　柴村紀代）2015 年 6 月公開予定.
4）佐藤将寛「北海道で最初の童謡詩人・浜田均二」(「へカッチ」12 号　日本児童文学学会北海道支部機関誌) 浜田均二略歴年表より.
5）和田義雄「児童文学の夜明け ── 開拓期から敗戦まで ──」(『北海道の児童文学』にれの樹の会 1979 年) によれば，「全国の主な童謡運動家に寄贈したことから有名になり，東京高師の雑誌「教育研究」の童謡教育特集号に北海道の童謡研究家として紹介されたという.
6）旧北海道銀行本店は 1912(明治 45)年 7 月に小樽で開行，1944 年(昭和 19 年)に北海道拓殖銀行へ吸収合併された．佐藤将寛の調査で「『北海道の児童文学』（にれの樹の会編）に北海道拓殖銀行とあるのは間違い」と確認された.
7）「北海道童謡協会」，機関誌「童謡芸術」これについては，注 1，注 2 にも記述はあるが，現物を確認でき

なかった.

8）注 4 と同.

9）佐藤将寛「『越後のアンデルセン』と言われた童謡詩人･片平庸人の詩の純粋性」日本児童文学学会第 44 回研究大会レジュメ　2005 年 10 月.

・佐藤将寛「童謡詩人・片平庸人の漂流」(「へカッチ」10 号　日本児童文学学会北海道支部機関誌　2006 年).

10）加藤多一「北海道の児童文学」(日本児童文学者協会北海道支部　1966 年) 北海道で最初のまとまった評論誌. 1966 年 10 月 25 日から開かれた「北海道文学展」に合わせて発行されたＢ 6 版 34 頁の小冊子.

11）佐藤将寛「海老名禮太の現役時代」(「ポウタラ」 2 号 2009 年 6 月).

12)「童話研究」(日本童話協会) は 1922(大正 11)年創刊, 1941(昭和 16)年終刊まで全 21 巻 159 冊がでており, 復刻版が久山社より 1988 年にでている.

13）谷暎子「『函館の小学生』･『函館のこども』の解題と総目次」(「へカッチ」 3 号 1997 年).

14）佐藤将寛「百田宗治と北海道」(「へカッチ」 3 号 1997 年).

15)「北の子供」昭和 21 年 4 月創刊―25 年 1 月終刊　新日本文化協会　全 38 冊.

16）童話集「はる・なつ・あき・ふゆ」1946 年白都書房.

〈参考資料〉

大阪国際児童文学館・編『日本児童文学大事典』第二巻　1993 年.
にれの樹の会『北海道の児童文学』北海道新聞社　1979 年.
北海道文学館・編『北海道文学大事典』北海道新聞社　1985 年.
北海道児童文学全集第 13 巻「詩と童謡」立風書房 1979 年.

北海道童謡誌年表

明治 1	1868		大正 1	1912	
明治 2	1869		大正 2	1913	
明治 3	1870		大正 3	1914	
明治 4	1871		大正 4	1915	
明治 5	1872		大正 5	1916	
明治 6	1873	岩野泡鳴生誕	大正 6	1917	
明治 7	1874		大正 7	1918	児童雑誌「赤い鳥」創刊
明治 8	1875		大正 8	1919	
明治 9	1876		大正 9	1920	
明治 10	1877		大正 10	1921	
明治 11	1878		大正 11	1922	
明治 12	1879		大正 12	1923	浜田均二「こびと」発刊
明治 13	1880		大正 13	1924	
明治 14	1881		大正 14	1925	
明治 15	1882	野口雨情生誕	大正 15	1926	
明治 16	1883		昭和 1	1926	
明治 17	1884		昭和 2	1927	
明治 18	1885	北原白秋生誕	昭和 3	1928	童謡集『ありのお城』支部沈黙
明治 19	1886		昭和 4	1929	
明治 20	1887		昭和 5	1930	童謡同人誌「チチノキ」創刊
明治 21	1888		〃	〃	大久保テイ子生誕
明治 22	1889	三木露風生誕	昭和 6	1931	
明治 23	1890		昭和 7	1932	
明治 24	1891		昭和 8	1933	童謡集『ほうほう春』片平庸人
明治 25	1892	支部沈黙生誕	昭和 9	1934	童謡集『ランプと仔馬』坪松一郎
明治 26	1893	百田宗治生誕	昭和 10	1935	童謡詩集『納屋の子供等』坪松一郎
明治 27	1894	伊東音次郎生誕	〃	〃	童謡集『どんぐり』海老名禮太
明治 28	1895		昭和 11	1936	童謡集『かくれんぼ』伊東音次郎
明治 29	1896		〃	〃	『童謡界』奥保
明治 30	1897		昭和 12	1937	名取和彦生誕
明治 31	1898	吉田一穂生誕	昭和 13	1938	
明治 32	1899		昭和 14	1939	
明治 33	1900		昭和 15	1940	
明治 34	1901		昭和 16	1941	
明治 35	1902	片平庸人生誕	昭和 17	1942	
明治 36	1903		昭和 18	1943	
明治 37	1904	浜田均二生誕	昭和 19	1944	
〃	〃	更科源藏生誕	昭和 20	1945	
明治 38	1905		昭和 21	1946	
明治 39	1906	木村不二男生誕	昭和 22	1947	
〃	〃	海老名禮太生誕	昭和 23	1948	
明治 40	1907	入江好之生誕	昭和 24	1949	
明治 41	1908		昭和 25	1950	
明治 42	1909		昭和 26	1951	
明治 43	1910	坪松一郎生誕	昭和 27	1952	
明治 44	1911		昭和 28	1953	
明治 45	1912	渡辺ひろし生誕	昭和 29	1954	
			昭和 30	1955	
			昭和 31	1956	童謡集『鳩の扇子』渡辺ひろし
			昭和 32	1957	
			昭和 33	1958	童謡集『ニシパの祭』木村不二男
			昭和 48	1973	『コロボックルのセレナーデ』大久保テイ子
			昭和 49	1974	
			昭和 50	1975	
			昭和 51	1976	少年詩集「花と鳥と少年」入江好之